愛のかけら

愛のかけら

ポケット文春 136

1964 年 7 月 20 日　初版発行

定 価 300円

著 者　由起しげ子 ©

発行者　上 林 吾 郎

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西 8 ノ 4

印刷　大日本印刷

製本　矢嶋製本

落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

愛のかけら

由起しげ子

文藝春秋新社

愛のかけら・目次

決闘……五
ドブに捨てろ……三
波の白……四四
ある傾斜……六〇
密室の月……七四
島の男……九八
姉と妹……一二四
共犯者……一五一
信号無視……一七四
花のない季節……二〇三
妻の限界……二三一
生と死の祭典……二四七
接点……二六九
天の火……二九三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

装幀　中谷貞彦

決　闘

その列車に乗ったことは、利口ではなかった。
新潟始発の急行というのは、よく土地の人が利用する。誰とも顔を合わせたくないなら、別の列車をえらぶべきだったと気がついたが、もうおそかった。
辛島真子の頭の中には、一つのことが、うなっているだけだった。
（どうしても、今日のうちに東京に着かなければ……。どうしても……）
汽車に乗り込んで通路を歩いてゆくと、国語の教師が立っていた。知らん顔で通り抜けようとしたが、
「よう」
と声をかけられた。
「どこへ行くの？」
「ちょっと……」
「東京？」
「……」
「きみは委員だったんじゃないの、記念祭の――」
首をまげて口もとだけ笑ってみせて、おせっかいな教師のそばをすりぬけた。
最後部の車に、やっと四つ空いた席をみつけて窓ぎわに坐ると、
「真子ちゃん……」
と、どこかで彼女を呼ぶような声がした。むこうの席から首をのばして、同級の赤松由枝が笑っている。
（こまったな――）
と思ったが、由枝はもう派手なフレヤスカートをゆすって近づいて来た。
「見つかっちゃったわね――」
自分で声をかけて、やって来ながら、由枝は肩をすぼめて、そんなふうに言った。
きっと制服をぬいで、おしゃれ着をきて、流行のバニティケースなんか抱えて気らくに出かけるところを、由枝は誰かに見てもらいたかったのかもしれない。
「国語、乗ってるわよ。前の車に――」
「そうね」
「あら、会ったの？」
「会ったわ」

「顔みられた？」
「話したわよ」
由枝は大げさな表情をつくって、
「まあ、おどろいた。ずうずうしいわね、何か言ってなかった？」
「べつに――。だって、記念祭さぼったのはむこうだって同じでしょ？」
赤松由枝はチョコレートの粒をとり出して真子の膝の上にのせた。
「ね、会いに行くんでしょう？　あの人……お元気？」
「元気よ……」
と言ったが、真子はうんざりした。これから東京までの間、この調子でつき合わされてはたまらない。悪いことに、この相手はかれのことを知っている……。
ひとの気も知らないで、由枝は言った。
「わたしも……あんな素直な人だとよかったんだけど……。ね、あんたたち、いつ結婚するの？」
由枝は、なおも、たたみかけるように言った。
「真子ちゃん、来年卒業したら、東京の大学へ行くんでしょう。あんたのことだから、入れるわよね。そしたら、どうするの？　結婚する？　学生だって、学生結婚ってのあるものね。それとも待たせる？　婚約時代をたのしみながら……」
「さあ、わからない。……考えたことないもの、そんなこと――」
「でもね、あんまり待たせるの、よくないって言うわね……」
その由枝の言い方から、真子はやっと思い出した。
「あ、そう言えば聞いたわよ、あなたのおはなし。ね、きかせて。どんな人なの、あなたの恋人って――」
すると、由枝は、パッと火をつけられたような顔つきになり、
「恋人なんて……だって親が見つけてくれたようなもんじゃない……」
と言ったが、案の定そこへ話が来るのを待ちかまえていたように、しゃべりはじめた。その話題なら、いくら話しても話し足りることはない、というふうに――。
真子は救われた思いで、話の合づちを打ちながら、うつろな眼を車窓に投げていた。
外を走る北国の平野は、いま、みどりの装いをつけ終わって、一年のあいだでもっとも美しい季節だ。

五月の、明るい光と風は、適当にすいた車内のすみずみにまで行きわたり、乗客たちの表情も、のびやかである。よく晴れた空も、こころよい風も、由枝が話しつづける恋人の話も、幸福そのものである。

彼女のように血相をかえて——顔に出すことだけは、どうにかおさえていたが——手提げ一つ持たず、うす汚れたダスターコート一つ、普段着のままというなりで坐っている者は一人もいない……。

「……ね、それが、二日か三日おきに、夜になると東京から長距離電話かけてくるのよ……」

と、眼前の幸福に酔ったような由枝の声がきこえて来る。

「そう、優秀じゃない……」

「それはいいんだけど……わたし、どうしようか、と思って……彼、いそいでるの」

「じゃ、さっさと結婚しちゃえば——。早い方がいいって考えなんでしょう、あなたも」

「それがねえ……」

由枝は声をひそめるようにして言った。

「すぐにしちゃおう、って言うの、二人だけの結婚。どう思う？　真子ちゃん——」

ニコリともせずに、真子は言った。

「いいじゃないの。結婚って、二人でするものじゃないの」

すると、由枝は、ぐっと乗り出すように昂奮した顔を近づけてきた。

「ねえ、真子ちゃん、あんたももう……『結婚』しちゃった？」

（ええ、もちろんよ！）

と真子は叫びたかった。相手が、もし由枝なんかでなかったら——。この富裕な商家の甘やかされた娘は、かつては真子の家の兄に熱をあげ、頻繁に押しかけて来ていたが、その頃、まだ何でもなかった兄の友人の桐原祐介と真子のことを（あの二人、あつあつよ）と放送したのだ。事実そのとおりになったのは残念だが——、とにかく、この人には、言いたくないのだ。言ったって、わかるような相手でもない——。

「実際には、そう簡単にもいかないわね——」

どっちとも取れる、そんな言い方をして、真子は眼をとじた。そしてもう由枝の話しかけて来るのに、ろくに答えなかった。

「わたし眠くなった。ゆうべ、ろくにねてないのよ。

ちょっとねかしてね……」

前の晩、眠っていないのは事実だった。しかし、眼をつぶっていても、頭のしんが痛むだけで、すぐに眠れるものではない。

――桐原祐介は、この正月にも帰国しなかった。それは会社の同僚とのやむないつき合いでスキーに行ったのだ、ということであった。（そんなに、つき合いのいい男に、いつからなったのだ。会社に入りたて、彼は会社がつまらないことと、同僚の悪口しか話さなかったのに――）四月から五月にかけての連休には、きっと会える、と言っていた。しかし、彼は遂にあらわれなかった。会社の出張で九州に行ったのだ、という。（前には出張の途中でも、廻り道して新潟へ寄ってくれた）

そんなことは、まだいい。連休の間、彼女は待ちつづけた人には会えないで、彼と同じ新発田の町の人に偶然会った。その人は、桐原が正月に帰ったのを見た、と言ったのだ。それが事実なら、彼は新潟を、下車しないで通過したことになる。

正月の休みは短いし、きっと蔵王のスキーの帰りにでも帰郷して、彼女のところに寄る時間がなかったのかもしれないが、それならそれと、どうして言ってくれないのだろう。

彼女はカーッとなって、すぐに手紙を書いた。その返事が、きのう貰った手紙だったのだ。

いろんなことが書いてあった。みんな、どうでもいいようなことばかり――大学の受験勉強をしっかりとか、会社が忙しくてやりきれないとか、近くアパートを変わるとか……。一行だけ、その中に奇妙な言葉がはさまっていた。

（おたがいの生活が変わるにつれて、歩む道も違ってくるかもしれないが、むかしのたのしかった思い出を大切に、傷つけないように自重しよう……）

はじめ読んだときは、何のことかわからなかった。二度、三度読み返すうちに、その不思議な文句の重なりが、ギザギザの、トゲトゲの、ムカデか何かのように、いやらしいものに見えて来た。

それは、いやらしい、という一語につきた。彼女は思わず手紙を投げ出した。

彼の真意はわからなかった。彼女がきいてやったことに一つも答えてないことも、もうどうでもよかった。彼が手紙の中にムカデを入れてよこした、ということ

が、彼女は許せない気がしたのだ。
彼女は手紙を書こうとした。しかし書けなかった。考えているうちに、ムカデは大きくなるばかりだった。
真子は、いつの間にか疲れて本当に眠ってしまった、と見える。
「もう東京よ、赤羽よ……」
揺さぶられながらその言葉をきくと、パッと真子はとびおきた。パッパッと点滅するネオンの中に大きいムカデが近づいて来る。あれを、やっつけなければ——。
「赤羽？　大変だわ、わたし降りなくちゃ——」
こうして、辛島真子は、卒然と東京の土をふんだ。彼女が汽車に乗ったときと、まったく同じように——。
赤松由枝は、呆然として声をかける間もなかった。手提げ一つ持たない身がるさで真子はふらふらと出て行き、列車はそのまま動き出してしまったのだから——。
赤羽——池袋——練馬。彼はすでに二三十分の距離にいる。
真子は、おなかがいたくなるような気がした。ぴんと張りつめた期待と呼ぶには緊張しすぎた、おそれのようなもの。しかし、やっぱり胸の底からこみあげて来るような、抑えがたいもの——。
彼女はそんな自身をもてあまし、東京へなぜ飛び出して来たことに後悔をさえかんじた。——もしかしたら、彼は部屋にいないかもしれない。その方がましなぐらいだ。……しかし、それだったら帰るのを待つだろう。家主のおじさんは一度会った彼女の顔をおぼえている筈だ。部屋に上げて待たせてくれるだろう。他の人の部屋ではない。彼のにおいをもった部屋だ……ソファベッド……緑のカーテン……彼女が贈った電気スタンド……。
その部屋にあるものを一つのこらず思い出し、その一つ一つにまつわる記憶をよみがえらせると、真子はいくらか落ち着きを感じた。そこには彼女を駈り立てているおそれや不安を割り込ませるすきは少しもないではないか——。
電車をのりついで、見おぼえの煙草屋の角をまがり、生け花の師匠の家の前に立ったときには、その看板の字を見たときには、懐かしさに胸をしめられさえした。
小さなアパートに行くには、家主であるその生け花の師匠の家の庭を通らなければならない。
のぞくと二階は暗いようだ。時間が早いから、まだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

帰らないのだろうか。でも、カーテンをピッシリしめて、スタンドの電気だけにしていたら光は見えない……。

家主の勝手口に人の気配があるので、元気よく声をかけた。誰か部屋にいたら聞こえるように大きく——。

「桐原さんは、まだお帰りになってませんでしょうか」

彼女は二階の方を見ていた。しかし、そこは静まり返っていて、台所の方から、冷たい女の声が返って来た。

「桐原さんですかア……桐原さんなら帰りませんよ、越しましたからね……」

おちつきはらった言い方は、まるでからかっているようであった。

真子は、しばらくものも言えずに、つっ立っていた。

「越したって……いつですか。いつのことですか」

「さあ、きのうだったかしら……いや、おとつい……私はアパートの方やってないから主人でないと、わからないんですよ」

「何処へ越したんですか」

「さあ、主人が帰らないとねえ、主人は何かきいてるかもしれませんけど……」

真子は脳みそをくりぬかれたような顔つきで、立っていた。

「行先なら会社でわからないかしら……もっとも、こんな時間じゃ、もう誰もいないかもしれないけど……」

声の主は、遂に顔を見せない。

——これが、東京というものなのか？

真子は「東京」から受けた第一のパンチから、やっと立ち直りながら、言った。

「御主人はいつお帰りでしょうか。待たせていただかないと……わたし新潟から出て来たんです」

「でも主人は御招待で、今夜はおそいと思うのよ、こまりましたわねえ。こっちは、いちいちアパートの人の引っ越し先まではたしかめないから……」

それから、何かを思い出したように、

「ああ、そこの運送屋さんできいてごらんになったら？　アパートの人たち、たいがいあの運送屋さんで荷物をはこぶようだから、もしかしたらわかるかもしれない。駅から来るとき道に大きな……ガレージみたいにトラックの入ってる店あったでしょう？」

それは親切というより、厄介払いのためのようにも

聞こえたが、今の場合、そんなあやあふな手がかりにでも頼るほかはなかった。

しかし幸運にも――と言っていいかどうかわからないが――運送屋の若主人は、覚えていてくれた。真子の言うことをきくと、キビキビした身のこなしで、大福帳のような帳面をくり、所番地を紙切れに写してくれ、荷物をはこんだ若い衆を呼んで、地図まで書いて教えてくれたのだ。

池袋まで引き返し、ふた駅ほど行ってから、また私鉄の電車に乗りかえて、混み合った車内の吊り革にぶらさがっているときには、さすがに明るい期待は、もう彼女の中にいくらも残されてはいなかった。

地図だけをたよりに、郊外らしく暗い、そのくせ家数だけはつまっている道を歩いた。彼女を前に押しすすめているのは、何ともわけのわからないファイトのようなものだけであった。

アパートはみつかった。

前のよりも、ずっと上等の、新築のガッシリした建物で、靴のまま部屋まで行けた。

管理人室で教わった、二階の、階段を上がった二つ目のドアに、彼女はやっと「桐原」という名前を読んだ。ドアにはまった波形のガラスには室内の明りが映っている。

コツコツと、たたいた。

「はーい……」

という返事が、すこし間のびしているような気がした。それでもまだ、劇的な対面――いきなりヒョイと顔を合わせたときの、おどろきとか、ショックとか、そういうものを想像していた。ところが、中の声はつづいて言った。

「……あいてますよオ……」

あいてるのか……そうか……ドアをあけに来てもくれないのか……。

把手を廻した。ステレオのジャズが中からおそいかかって来た。しかし、誰もいない。テーブルに食事の用意が出来かかっている。二人ぶんの食器がならんでいる。

奥の見えない部屋で金槌の音がしていて、桐原の声が言った。

「どうだった……酒屋わかった？　……冷蔵庫の場所やっぱりだめだな、ここじゃ。コードが足りないんだ……」

だまって立っていると、上の方から桐原の顔がのぞいた。
「……」
顔はすぐ引っ込んだ。ドシンと踏み台からおりる音がした。おちたのかもしれなかった。
それだけで、たくさんだった。
桐原祐介の顔にあらわれた、ものも言えないほどの驚駭、おびえ、狼狽——。真子は十分なものを見た。
しかし、まだおまけがついていたのだ。
「ただいまア……」
と言いながら、そこへノックもなしに、とび込んで来た若い女がいた。
「……ここ意外と便利なのね。おどろいちゃった、お魚屋さんも……」
女は真子とぶつかりそうになって、とび上がった。玉葱が落ちて二人の女の足もとにころがった。
「こんばんは」
真子の方で、声をかけた。彼女のうちに、何かが、すでに大きく回転しおわっていた。眼の前に立っている、この女房気どりの女の、肉のうすい青白い顔と、裾のひらいたワンピースのおとなしいかんじのつづき模様に視線をあてながら、真子は余裕をもって言った。
「学校がお休みなので、新潟から出て来ましたの。姉のうちに来たんですけど、桐原さんお元気かどうかと思って、ちょっとのぞきに来ただけ……」
「あら、どうも……」
世なれないかんじの若い女は、助けを求めるように桐原の方を見ている。彼が紹介してくれるか、上にあがれと言ってくれればいい、と思っているらしいのだが、その桐原が、ワイシャツの腕まくりをして金槌をもっているという威勢のいい恰好のわりには、ぼんやりして、ただ突っ立っているだけなのだ。
「……こんなところで……。ちょっと、おあがりになったら……ねえ——」
そう言って、また同意をもとめるように桐原を見た。東京の、常識的な家庭の、常識的な娘さんらしく、感じはわるくないが、二重瞼の眼のあたりが可愛いらしいだけで、そのほかは取り立てて美しくもなければ、魅力的でもない。抵抗も感じないし、相手どるほどのファイトもわいて来ない。
真子はこの、滑稽で無用な猿芝居の幕をおろして、逃げ出すことしか考えていなかった。この気の毒な娘

のために。それから、もっと気の毒な桐原祐介のために。いや、それよりも、自分自身の、まだいくらかでも残された誇りのために――

「……じゃ失礼しますわ。顔を見たから、もういいの。さようなら……」

言い捨てると、真子は後を見ずに部屋を出て行った。

彼女が部屋にいた間は、長くかんじられたが、劇の所要時間は二分にも足らなかったろう。一人の人間の中に、決定的に何かが死に、何かが生まれるに要した時間であった。

アパートの角をまがると、後から足音が追って来た。

真子は歩速をゆるめなかった。

「誤解しないでほしいんだ……」

「……」

「やましい関係じゃないんだよ、会社の重役の姪なんだ。いつか君に話そうと思ってたんだけど……機会がなかったんだ……」

「……」

「わかってくれよ、清潔なつき合いなんだ。僕も信用が大事だし……二十七だからね……結婚のことも真面目に考えなきゃならないんだ。君にもそのことを話したかったんだ……」

真子は一言も答えず、歩いていった。

電車の線路が見えはじめたとき、彼女は、はじめて言った。

「……およめさんが心配するわよ。放っといていいの？」

それでも桐原がついて来るようなら、ゆっくり話し合ってみようか、という気はあった。

ところが、彼女にそう言われると、桐原は浮き足立ったように、

「じゃ、とにかく今日は……。いずれね……。姉さんのところに泊まるんだろ？」

「ええ、早く帰ってあげなさいよ……」

桐原はそれで、ほっとしたように、顔をほころばせて、手を振りながら帰って行った。生け垣の角をまがってからは、駈け足になる下駄の音がハッキリときこえた。

――帰って行った！　あの女のところへ。

「結婚するけど、わかってくれ」と言った、あの女のところへ。釈放されて、あんなによろこんで、安心し

て、駈けて行った。わたしを一人、ほうり出して——。
その、最後のパンチは、きいた。
追いかけて来た彼に、まだいくらかの希望を取り戻しかけていたところだけに、その打撃は決定的であった。
真子は、暗い線路のところに立っていた。
人が見たら、とび込みそうに見えたかもしれない。
しかし、それどころか、彼女は顔に、うす笑いさえ、うかべていたのだ。あんまりみごとなドンデン返しに、あまりに立派すぎた答えのために、彼女は満足でさえあった。
彼女は自分が何のために東京にとび出して来たのか、何をたしかめるために来たのか、今やっとわかったところであった。彼女が受け取った答えが、それをわからせてくれたのだ。
『愛』とは、何だったろう——。男があれほど彼女の耳に囁きつづけた言葉は、そして彼女が絶対のものだと思いつづけた、その言葉は、いったい何であったのか？『愛』の名のもとに、どんな行動も、行為をも許され、正当づけられ、バラ色にかがやきさえした。
それなら『愛』は男の欲望をみたすための名目だけのもの、女に夢を与えるための、キャッチ・フレーズにすぎなかったのか？
ほんとうに笑い出したかった。暴風雨に吹き払われたあとの空のように、気持ちの底には、すっきりした晴れ間さえあるようにかんじられた。
ただ困ったことは、今夜これから、何処へ行ったらいいのか。これから、どんな生き方が彼女に残されているのか、さっぱり思いつくことが出来なかった。
線路の向こうに駅の灯が見えたので、ともかく、そこまで歩いた。
駅につくと、電車に乗った。
電車が着いたところで、みんなといっしょに降りると、びっくりするほど大勢の人が歩いていた。新宿らしかった。
何となく歩いていると、突然声をかけられた。
「あのう、おひとりですか……」
見ると、知らない人だ。
「お茶でもどうですか……」
と、見知らぬ男は言ったようだったが、真子には無関係なことだった。黙殺して行きすぎた。一切のものが、今、彼女には無関係であった。

無関係の人、人、人……。限りなくつづく人の渦の中にいることが、彼女にやすらぎを与えた。

初めて初夏が来たような、あたたかい夜で、女の人はみんな腕を出し、からだの線もあらわに、ハイヒールで舗道を蹴って歩いている。彼女のように野暮くさい恰好の女は見当たらないが、彼女はもちろん引け目にかんじたりしないし、誰もそんなことに注意を払いはしない。

——そして、これも東京の顔なのだ。目くるめくような光と、色彩と、流れと、かみつきそうな視線をぶっつけてゆく男たちと——。

何という空しさだろう。妖しさだろう。

しかし、彼女はのどが渇いていることに気がついた。

さっき「お茶を——」と言われたからではない。考えてみると、家を出てから何も飲まず、何もたべていなかった。

何かをたべるべきだ。

食堂のようなところに入って、お水をお代わりして飲み、どんぶりものを頼んでたべた。

胃袋が正常な状態にもどったところで、また考えた。

さて、どうしたものか？

彼女は『行く』ことだけ考えて、帰りのことまで考えていなかった。ただ目的さえすめば、そのまま帰ればいい、という気だった。だから何一つ、持っては来なかった。家には、どうしても見たい展覧会があるからとか、大学の入学要綱をもらうためとか言って来た。そんなことは、もちろんどうでもいいことだ。キャッチ・フレーズだ。彼が耳もとにささやいた言葉と同じように。

それなら帰ればいいではないか。

しかし、帰る気はぜんぜんしなかった。

世田ヶ谷に、姉が結婚して住んでいる家がある。家では、当然そこへ泊まると思っているし、彼女も少しはその気でいた。

でも、今となっては、そんな気持ちは少しもなくなっていた。

今までの自分と全く関係のない場所と、関係のない人のなかに、身をおきたかった。いつまでも——。

外へ出て、ふらふら歩いていると、また声をかけられた。

「お茶つき合ってくれませんか。頼みます。お茶……」

真子は今度は立ちどまって、じいっと穴のあくほど、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton